



ココロさんの ひとごと

2019年1月 No.3

子どもの「時間感覚」

毎日の生活は、時間によって動いていると言っても過言ではありません。学校を例にすると、始業時刻は何時何分、1時間目は何時何分からといったように、時刻や時間によって区切られ、動いています。保育園、幼稚園でも同じです。家庭の中でも、時間を意識せずには過ごせません。



しかし、子どもは大人ほど時間を気にして生活しているのでしょうか？ 多くの場合、答えはノーです。このため、周りの大人が、「早く、早く」とか「〇時になったよ」と、子どもの行動を促す（急かす）言葉をかけない日はないのです。

では、子どもは時間をどのくらい意識しているのでしょうか？ 一般的に子どもが就学前あたりの歳になると、周りの大人は時間を意識させる言葉をかけ始めます。しかし、小学校低学年までの時期は、実際に「目に見えるもの」は理解できますが、「目に見えないもの」を理解することは難しいと言われています。時間は、「目に見えないもの」です。ですから大人と違って、小学校低学年までの子どもが時間を意識すること、ましてや時間を計画的に使うことは、難しいことなのです。しかし、決まった時間内に生活を収めることは、この時期の子どもにも求められています。そこで、周りの大人は手本を示したり、ヒントや助けを与えたりすることが必要になります。学校の先生は、小学校1年生には「遊ぶ前に、宿題をしましょう」とか、「お家に帰ったら、すぐにお家の人に学校からのお便りを渡しましょう」などと、具体的に『いつ』といった情報を伝えています。子どもは先生のこの言葉どおりに行動することで、時間への意識が芽生えます。そして、同じことを繰り返し行うことで時間の使い方に慣れていき、応用できる力がついてくるのです。

子どものこの「目に見えない不確かな『時間感覚』への挑戦（時間を意識して計画的に使っていく練習）」には、まずは身近にいる大人と一緒に参加してあげてはいかがでしょうか。できた時には子どもには達成感と自信がついてきます。そして、経験を重ねるうちに「一人で段取りをつけた行動」ができる力が身についてきます。もちろん、兄弟姉妹やお友達と一緒に体験することも良いですね。

繰り返しになりますが、気をつけていただきたいのは、「目に見えないもの」が理解できるようになり、時間感覚が育ってくる小学校高学年までは、自分一人で時間の段取りをつけていくことは難しいということです。ですから、それまでは、日常生活の中で年齢に応じた時間感覚を、身近な大人と一緒に培う体験を重ねてみましょう。もちろん、時間感覚の育ちにも個人差があるので、中学生だから、あるいは、高校生だから育っていて当然と決めつけず、子どもの状態を見取り、必要であればサポートを続けることも大切です。



子どもには伸びる力が備わっています。できる年齢は必ずくるのです。そのタイミングで、周囲の大人がヒントや助けをそっと与えてあげると子どもは力を発揮します。このタイミングを逃さないためにも、どうか子どもをいつも見守っていてあげてほしいのです。

